

## サッカーの伝播・受容を考える

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード: 作成者: 寶學, 淳郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43059">http://hdl.handle.net/2297/43059</a>

シンポジウム報告

サッカーの伝播・受容を考える

寶 學 淳 郎\*

Historical Inquiries into the Process of the Diffusion and Acceptance of Soccer

HOUGAKU Atsurou\*

日本体育学会第61回大会（中京大学）

体育史専門分科会シンポジウム「サッカーの伝播・受容を考える」

日 時：2010年（平成22年）9月8日（水） 13：00～15：00

会 場：中京大学豊田キャンパス

コーディネーター：寶學 淳郎（金沢大学）

発表者・演題：成田十次郎（筑波大学名誉教授）（コーディネーター代読にて紹介）

サッカーの伝播と受容・展開を考える—ドイツの場合—

福島 寿男（国立国会図書館）

大正期におけるサッカーの中学校への普及とその日本サッカー史への影響

山本 英作（高知学園短期大学）

ブラジルにおけるサッカーの伝播・受容—「定説」と再構築される歴史像—

開催趣旨（Introduction）

近代スポーツの多くがイギリスで誕生し、瞬く間に全世界へ広がっていったことは周知のことである。その際、近代スポーツがどのように伝播・受容されたのか？これはスポーツを歴史的に研究する者でなくとも興味深い問題と思われる。

1994年にアレン・グットマン（Allen Guttman）によって上梓された“Games and Empires：Modern Sports and Cultural Imperialism”は、谷川稔先生他によって翻訳（『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義』1997年）されたこともあって私たちの注目を集めた。それは、本書が近代スポーツの世界的伝播という壮大なテーマをそれまでになく正面から論じたからであり、私たちに馴染みの深いサッカーや野球などととも、日本ではあまり普及することのなかったクリケットなどが、いつ頃誕生し、どのように世界へ広がったのかをコンパクトにまとめたからと考えられる。また、同書において展開された文化ヘゲモニーというグットマンの切り口も私たちにインパクトを与えた。

近代スポーツを「伝える側」と「受容する側」の諸事情は多様である。私たちはまず数多くの実証的な個別研究を積み上げ、論議していく必要があると思われる。本シンポジウムでは、ドイツ、ブラジル、日本の場合を取り上げ、近代スポーツの一つサッカーの伝播・受容について考えたい。

以上は予稿集に抄録として掲載したが、シンポジストの紹介も兼ね、もう少し補足したい。

まず、なぜ、私がサッカーの、それも伝播・受容なのか？についてである。私はドイツスポーツを主に政策史的に研究しているが、今までに自分の専門とは異なる幾つかの共同研究に参加した。今回のテーマにかかわるものとしては、東京高等師範学校の課外スポーツや<sup>1)</sup>、同附属中学校の体育活動などがある<sup>2)</sup>。その際には見落としていたものもあるが、先行研究に目を通したり、校友会誌などの史料に触れる機会が

\*金沢大学

\*Kanazawa University

あった。そして、自分の担当箇所を執筆しながら、日本では、野球、陸上などに比べてサッカーにかかわる歴史的研究は少ないと感じ<sup>3)</sup>、渡辺融先生の研究などを参考に、将来自分で調べてみようと考えていた<sup>4)</sup>。サッカーへの関心は、その世界的伝播や人気とともに、私自身が選手、コーチ、教員として長くサッカーにかかわってきたことにもよる。

種目史研究に関してであるが、私が成田十次郎先生（筑波大学名誉教授）と初めてお話をしたのが、1988年のことで、20年以上前になる。その際に先生が、これからは種目史研究も必要となるでしょう、とおっしゃられておられたことを私は記憶している。その後、わが国においても、種目史研究で学位論文が出始めていることは周知のことである。イギリスのホッケー史研究（秋元忍先生）、日本のテニス史研究（後藤光将先生）などである。種目史研究は今後とも増加していくのではと個人的には思っている。このことについても、今回のシンポジウムで少し論議できればと考えている。

今回、私は、体育史専門分科会のシンポジウムをコーディネートする機会を得たが、サッカー史でやってみよう、と考えた。是非ともお話を伺ってみたいとお二方がすでに念頭にあったからである。

お一人は先の成田先生である。先生は申すまでもなくドイツスポーツ史研究の第一人者であるが、私は、先生が公にされていないドイツサッカー史に関する研究を蓄積されていることを以前から知っていた。東京教育大学で活躍されサッカー日本代表候補となり、またディトマル・クラマー氏の招聘、読売サッカークラブやJリーグの立ち上げなど日本のサッカーにも長く携われた成田先生のドイツサッカー史にかかわるご発表とご意見を是非伺いたいと思っていた。

もうお一人は、国立国会図書館に勤務されている福島寿男様である。ご存じの方もおられると思うが、福島様はネットで「日本サッカー・ブックガイド」というサイトを開設されておられるとともに、「日本サッカー史研究会」で度々発表されている。私はこのサイトを初めて見たときその量的膨大さと緻密さに正直驚いた。サッカー史にかかわるサイトとしては、他にジャーナリストとして長くサッカーにかかわっておられる牛木素吉郎様「Viva! Soccer.net」や賀川浩様「日本サッカーアーカイブ」のものが、時代の証言的な意味において重要であるが、福島様のものは別の意味で大変重要なものと考えている。福島様は日本体育学会の会員でないので、お会いする機会はなかったが、日本のサッカーにかかわる膨大な文献を整理されておられる福島様の日本サッカー史にかかわるご発表とご意見を伺いたいかねてから思っていた。

このお二人にシンポジウムへの参加をお願い致しましたところ、早速にご快諾いただいたので、もうお一人にシンポジウムへの参加をお願いした。山本英作先生である。先生がサッカー史、特にブラジル・サッカー史をご専門にされていること、そして、今回のシンポジウムに世界的な広がりをもたせたいと考えたことから、先生にご発表をお願いした。

各シンポジストの方には、サッカーの伝播・受容にかかわるご発表をとお願ひしたが、それ以上の制約はしていない。既に述べように、個別的、実証的研究の蓄積とその論議がまず必要と考えているからである。

## 註及び引用

- 1) 阿部生雄、寶學淳郎「高等師範学校の課外スポーツ」、『茗溪八十年 東京高等師範学校体育科創設八十記念誌』所収、菜摘舎、平成7年、163-178頁。
- 2) 阿部生雄、寶學淳郎他「東京高等師範学校附属中学校における課外体育活動の歴史」、筑波大学体育科学系紀要、第21巻、平成10年、29-41頁。
- 3) 日本サッカー史を概観するには例えば次を参照。日本蹴球協会編、『日本サッカーのあゆみ』、講談社、昭和49年。
- 4) 例えば次を参照。渡辺融、「日本における野球の受容・定着過程」、『スポーツの普及・伝播』所収、創文企画、平成5年、11-36頁。